

コミュニケーションを妨げるもの⁽¹⁾

What disturb Communication'

富士 隼之助
Junnosuke FUJI

1. はじめに

「人間関係」と言うことばをよく耳にするが、それに続くことばにはネガティブなものが多いと思われる。「人間関係は難しい」「人間関係に悩む」「人間関係は大変だ」「人間関係に気をつけねば」と。

良い人間関係を保って行くには、円滑なコミュニケーションが前提になると考えられるから、先述のようなことばが多く使われると言うことは、その困難さを表わしていることになる。「ことば」と言う最高のメディア⁽²⁾を持つわれわれがなぜ容易にコミュニケーションできないのか。何がそれを妨げているのかを探してみたい。

J・L・アラングレンはコミュニケーションをa) メッセージのb) 送出c) 搬送d) 受容による情報の伝達と定義している⁽³⁾。ここではこれを借りて、各段階にどんな問題点があるのか、一般意味論を中心にして考察する。

2. メッセージの源——経験の世界

われわれは経験及びそれを「ことば」としてプールした知識を記号化し、「ことば」に置きかえてメッセージを造出している。それによって情報を伝達し、受容者はそれを解読・解釈して、コミュニケーションが行われている。したがって、メッセージの源は経験の世界にあると考えられる。

S・I・ハヤカワはこれを、直接経験によって知る外在的世界と、他者の経験を「ことば」⁽⁵⁾による報告・推論などを通じて経験する言語的世界とに分けている。

a) 外在的世界（直接経験の世界）

「われわれの経験の「対象」は「物自体」ではなくて、われわれの神経系（それは不完全なものだ）とその外側の何かとの相互作用である⁽⁶⁾」とハヤカワは言う。更に、「きき方の理論」の中で齊藤美津子は「音と意識したときはすでに自分のフィルターにかけてしまったもので、その物自体の音ではないのです。自分のフィルターを通して意識した音なのですから、もはや自分流になっているし、完全なものではないことをきき手は知っておかねばなりません⁽⁷⁾」「このことを人間の宿命として意識しなければならない」と述べている。

大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院「研究集録」第7号（1987年）

すなわち、われわれの直接経験の対象は「物」自体ではなく、恣意的に取り入れられた刺激のみが、神経系との相互作用によって、意識されたものということになる。それゆえに、われわれが見たり聞いたりしているものはその「物」すべてではなく、その一部を自分流に抽象して見たり聞いたりしているのである。その実例をあげてみよう。

本学でS・Gの時間に「はじめて学舎の前に立って」と題して小文を書かせたことがある。⁽⁸⁾調査のデータとして取り上げるのには無理があるが、⁽⁹⁾同じ場所で同じ建物を見た経験の多様さはうかがえる。

新しい建築だから、70%の学生は「きれい」「美しい」ということばを使用している。しかし、同じ「きれい」と表現していても、「声が出ない程」「こんな学校はじめて見た」「予想以上」「他と比較して」などの修飾語が併用されているのを見る時、経験が同一でないことは想像できる。更に、「大きい」「小さい」「広い」「狭い」「大学らしい」「大学らしくない」と言う。11%の学生は「学校らしくない」と。何に見えたかという、「教会」「マンション」「文化会館」「ホテル」「美術館」「病院」「幼稚園」「デパート」等々19種の名称が使われている。この実態からみて、経験の多様性は言うまでもなく、われわれは実在している「物」全体を見ていない、見ているのは恣意的に選ばれた一部であるということが推定できる。J・コンドンは「知覚作用は能動的なプロセスであって「自然」なものでもなければ、同じような視力の持主なら誰でも同じ知覚作用をするわけではありませぬ⁽¹⁰⁾」と述べている。斉藤美津子の言うところの自分流の見方であると言える。

勿論、この小文はメッセージとして送出されたものであるから、「ことば」に置きかえられた個々の学生の直接経験は、表現されたものにより正確に分類することも、推測することもできない。このことはA・ラボポートの「経験とは全く内的なもので、そのものとしては伝達することはできない」「伝達されるのは言語である」と言うことばから理解される。自分の経験は他者と共有できないことになる。

経験はまったく自分流のものであり、他と共有できないものであることについて、森有正は「生きている経験というものは一人称でしかありえない。ほかの人は絶対にその経験を直接にすることはできない⁽¹¹⁾」と言い、コンドンは「「それ」はただ一つではない。歴史上どの時点をとってみても人間の数と同じだけ「それ」が存在するのです⁽¹²⁾」と無限の多様性を述べている。

外在的世界は比喩的に「現地⁽¹³⁾」と言われ、直接経験により知りえる世界であり、指し示し実証することができる世界である。しかし、経験はまったく個体的であり、無限の多様性を持ち、他と共有できず、しかも、そのものとして伝達できないことになれば、それが、ハヤカワの言うように、われわれの知識の僅かな部分であっても、メッセージとして送出される直接経験を解説・解釈する至難さは免ぬがれることはできない。

b) 言語的世界（間接経験の世界）

コミュニケーションを妨げるもの

ハヤカワは外在的世界の「現地」に対し、言語的世界を“ことば”によって描かれた「地図」にたとえる。そして、われわれは知識の大部分を“ことば”による報告（の報告、の報告の報告……）すなわち情報として受取ると言う。他者の直接経験を“ことば”を介して経験することになる。「地図」としての経験である。

「「地図」は「現地」ではない」は一般意味論の原則である。¹⁴⁾ 勿論、正確な情報を入念に集めれば、比較的正確な「地図」も描けることがある。加藤秀俊が書いている高田保の例もある。¹⁵⁾ ベストセラーになった「菊と刀」のR・ベネディクトがフィールドワークをしないうで書いたことを、それを読んだ人は知っている。このような特別な人は別にしても、われわれ自身優れた技術による正確な測量地図を持つことができる。又、マスコミを通じての豊かな情報により、世界各地の事情について現地に住む人以上に全体的な、かなり広い知識が得られるのである。あたかもパリに住むフランス人の多くよりパリ全体について、より博識であった高田保のように。しかし、「地図」はいかに正確であっても「現地」ではありえないのである。

春の七草の名は言えても、実際に野山へ出てそれらを見つけることは困難である。又、国土地理院の地図を見て、登山道の傾斜は読みとれても、登山靴でなければ歩けない道かどうかは判断できない。実物を手にとり、自分の足で山道を踏んでみなければ、正しい判断はできないのである。筆者は立山の万年雪の上を中ヒールの靴で歩いている人を見て驚いた経験がある。地図からは想像もできないことである。

「地図」にたとえられる言語的世界も経験の世界であるから、外在的世界と同じように、その経験は個体的であり、他者と共有はできず、そのものとして伝達することはできない。報告によりどのような「地図」が描かれたかを、他者は知ることは不可能である。たとえ誤りの「地図」が描かれていても、それを他者は指摘できない。“ことば”に置きかえられたメッセージの誤りは指摘できても。

なぜ誤りの「地図」が描かれるのかについて、ハヤカワは言う。¹⁶⁾ 報告が「物」に基づかない想像であったり、間違えている場合、正しい報告からの推論が誤っている時、言語の修飾がある場合などわれわれは外在的世界と関係のない「地図」を言語で作るのである。更に、このようにして誤った「地図」が与えられたり、与えられた「地図」は正しくとも読み違えたりすることにより誤りの「地図」がわれわれの頭に入るとしている。

言語的世界は「物」そのものでなく、メッセージとして送出された“ことば”に対応して描かれた個体的な、正確な（誤りの）「地図」の世界である。後述する受容の段階を経た経験の世界であるといえる。

以上のように、直接経験による外在的世界も、“ことば”を介しての言語的世界も、いづれも経験の世界であるから、個体的、内的なものであり、他者と共有できず、そのもの

大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院「研究集録」第7号（1987年）

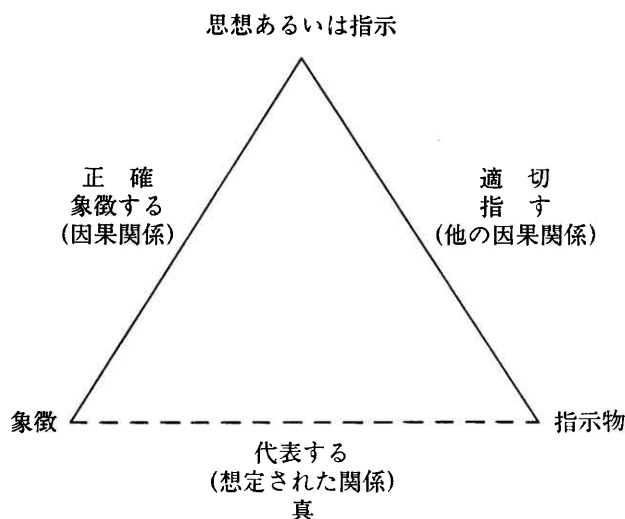
として伝えられない世界である。その上、後者にあっては誤りの「地図」さえ描かれるのである。この内在的事実を“ことば”に置きかえ、メッセージとして送出しているのである。果してどこまで正確にコミュニケーションできているか、われわれには確認のしようがないのである。

3. 搬送——“ことば”の限界と力

そのものとして伝達できない内的な経験は“ことば”に置きかえられ、音波・光波になり、単にわれわれの感覚器官を刺戟するものとして搬送されるのである。アラングレンが言っているように「介在的な搬送過程には、固有の意味はない⁽¹⁷⁾」ことになる。

このことを一般意味論では“ことば”は「物」ではない⁽¹⁸⁾と言ひ、意味のない記号と「物」との混同を戒めている。

この原則に影響を与えたと言われるオグデン・リチャーズは「意味の意味」の中で、三角形の図を示しながら「象徴と指示物との間には間接関係以外にとりたてるべき関係はない⁽¹⁹⁾」。



その関係は誰かが象徴にある指示物を表させる時に生ずる⁽²⁰⁾。」と述べており、シンボルに指示機能を与えるのは人間であると言っている。ある「物」を誰かが「イヌ」と指して言った時「イヌ」という“ことば”がその物を代表するようになるのである。

“ことば”と「物」とは意味的に直接関係はなく、“ことば”≠「物」であるから、ある「物」が「イヌ」「dog」

「Hund」であり「chien」でありえるのである。しかも、「イヌ」と「dog」と「Hund」と「chien」の間には定義的な関連はあっても、“ことば”そのものとしてなんら関係はない。森有正が言うように「先ず経験があり、あとでそれに名をつける⁽²¹⁾」のである。その名が文化的、社会的に認められれば、子音と母音がどのように組合わされようが、“ことば”としてその社会に通用することになる。これが意味づけの過程と考えられる。

しかし、先に述べたように、われわれの経験は個体的であり、無限の多様性を持っているから、その一つ一つに名をつけることは不可能である。仮りに名づけたとしても、それは主体的な記号であり、記号のうずは社会の混乱を招くのみで、コミュニケーションのメディアとしての機能を保持することはできない。したがって、自分ひとりの唯一回の経験は、的確に表現できる唯一の記号ではなく、社会的に通用する近似的な意味を持つ“ことば”に置きかえられ、はじめて送出が可能になるのである。森有正のことばを借りれば次

コミュニケーションを妨げるもの

のようになる。「ことばというのは主体的なものではなく、全く社会的・客体的なもので、決して発明することはできず、与えられたことばしか使えません。つまり与えられたことばをもって、ほかの人とは共通しないものをあらはすというところに、「経験」における言語の特別な用法が出て来ます²²⁾」そして、「個の普遍化」が生じると言う。

一方、ハヤカワは比喩的な「抽象のハシゴ」の図²³⁾を用い、その諸特性は無限でまた常に変化している「原子的過程のレベル」(知覚できない)から「知覚のレベル」「言語のレベル」へと一段一段その特性を落しつつ、抽象化の段を昇るのだと言う。「われわれは「過程としてのもの」と「他の類似のもの」との類似点に注目し、差異は無視するのである。そして比較的静止した「観念」²⁴⁾「概念」あるいは語へと大飛躍して、抽象し分類して行くのであると書いている。言いかえれば、人間が経験から資料を抽象し、それを一般化する能力を持っているから、「ことば」は可能になるのである。

個体的な多様な経験は抽象一般化され、分類されて名づけられ「ことば」になる。そして、名づけられることにより「個は普遍化」し、経験は個性性を失うのである。なぜなら、「ことば」は発明することはできず、社会的に与えられたものを使用しなければならないからである。したがって、われわれの個体的な経験は近似的な意味づけをされた「ことば」でしか表現できないのである。鈴木孝夫が言うように「ことばの意味は、個人個人によって非常に違っている²⁵⁾」ということになる。各人がどのような経験をどのように抽象し、近似的意味づけをするのに、どの「ことば」を選んだかということは、極めて個体的なことであるということ、このことばは示していると考えられる。

われわれがこの過程を無意識のうちに踏んでいることは、次のような例から推測できるだろう。

日常生活で表現のしようのない異様な音を聞くことがある。(抽象一般化ができず名づけが不能の例)

お寺の鐘の音は「ゴーオン」と普通表現されるが、そんな単純な音ではない。(近似的な意味づけと後述する「ことば」の力の例)

コミュニケーションの場で自分の思想・意見を的確に表現する「ことば」を捜す苦勞。(与えられた「ことば」の中より選ぶ難しさの例)

以上見て来たように、われわれの経験を的確に表現しえない「ことば」ではあるが、一度近似的な意味づけがなされた「ことば」によって名づけられると、「物」そのものを隠す力を持っている。個体的な経験が「ことば」で客観的に表現されると、その客観性が個体的な経験を普遍化し、ステレオタイプ化する。先に例示した鐘の音は「ゴーオン」と聞えるのである。

この「ことば」の力は、われわれをして「物」そのものではなくて、「ことば」に反応して行動させることになる。「ことば」と「物」との混同は迷信・宣伝・政治的煽動などの

大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院「研究集録」第7号（1987年）

充ちた意味論的環境を作り出し、われわれを混乱させている。これを免れるには「コトバの力と限界について体系的に知らねばならぬ」とハヤカワは述べている。

個体的経験が抽象一般化されたものに名づけられるから、「ことば」は伝達の機能を持つことができるのだが、それゆえに近似的な表現しかできないという限界があることを、われわれは知らねばならない。同時に、「ことば」は「物」ではなく、それ自体意味を持たないにもかかわらず、ひとり歩きをして、「物」そのものを隠す力があることも併せて記憶しておく必要がある。

4. 送出・受容——コミュニケーションの限界

先述のように、搬送（伝達）の手段としての「ことば」には本来的に意味がなく、意味づけするのは人間であるから、メッセージの送出・受容は意味づけの段階であるといえる。

送出者は自己の個体的経験を抽象一般化した近似的な意味を、辞書の定義の範囲において選ばれた「ことば」に託し、メッセージとして送出するのである。受容者はこのメッセージとしての「ことば」を、自己の個体的経験と照合し、思考して類似の意味を見出し解読・解釈するのである。しかも、この両者の行動は内的なものであって、お互いに無関係に自分流で行われているのである。これよりすれば、コミュニケーションには構造的に曖昧さがあり、莫然としたニュアンスしか伝えられないということをわれわれは認めないわけにはゆかない。

その上、送出者と受容者をつなぐ「ことば」のもつ意味について、ハヤカワは、ヘラクリトスの「人は同じ川に二度入れない」ということばに習い、「いかなる語も決してまったく同一の意味を二度持つことはない」その理由として、まず、「発言の文脈がその意味を決定するという命題を肯定するなら、二つの文脈がまったく同一ということは決してないから」をあげている。「自動車を買う」と「あなたの能力を買う」との「買う」という意味は違う。社会党の文書に書かれた「民主主義」と自民党のその意味は微妙に違うのである。

次に、内在の意味は各人の記憶する内容（経験をプールしたもの）によって違うから、同じことばで表したものでも人によって僅かであっても違う。

更に、外在の意味の場合は、四人の人が「僕のタイプライター」と言う時、四つの違った「タイプライター」を指さねばならない。しかも、その一つ一つは「過程として」の物だから刻々と変化しているので、何時もまったく同一であるとは言えない。以上のようにハヤカワは3つの理由をあげている。

この三つの理由に加え、ノンバーバル言語、コンテキストの概念（文脈はこの中に入る）を取り入れ、更に、われわれ自身が刻々と変化する「過程として」の存在であることを考え合せば、われわれの言語は二度とまったく同じ意味を持つことができないとする

コミュニケーションを妨げるもの

ハヤカワのことはほうなづける。

送出者が選んだ“ことば”に与える近似的な意味が、いつも同じでなく、先述したように個人によって異るとすれば、受容者がメッセージを誤読・誤解することは避けられない。

コミュニケーションの構造的な曖昧さと、“ことば”のもつ意味が何時も同じでないことによって、受容者はしばしばメッセージを聞き間違え、それに基く推理を誤って誤りの「地図」を描くのである。そのみでなく、送出者の意図的な誇大修飾語・感化的内包⁸¹⁾を持つ言語、価値判断を含む断定などは一層受容者を惑わし、事実を誤認させる。

このようにして作られた意味論的環境の中で、受容者は、時には差別意識を持ったり、デマの源になったり、不必要に争ったりすることになる。ここには正しい意味のコミュニケーションの成立は見られないのである。

奥山益朗は「話し合いと対話」の中で、次のように書いている。

「自分の話している言葉が相手に思うがままに通じ、また相手の話していることの意味が自分の理解している意味であるということの保証はどこにもない⁸²⁾のである」

送出と受容に見られるコミュニケーションの限界を見事に表していると考える。

5. コミュニケーションを妨げるもの

コミュニケーションの各段階の問題点を見て来たが、改めて妨げるものは何か、まとめてみよう。

まずコミュニケーションの構造を分析してみると、次のように言える。送出者と受容者はそれぞれ人の数だけあると言われる程多様な、しかも、そのものとして伝えることのできない個体的な経験の世界を持っている。その両者を、本来的に意味のない搬送手段である“ことば”を以ってつなぎ、そのものとして伝えられないもの伝えようとしているのである。

すでに、根本的に絶望的な姿が現われる。しかし、われわれは“ことば”に近似的な意味づけをしてコミュニケーションしているが、この意味づけという内的な行動は相手には確認できないから、お互いに自分流に意味づけしていることになる。したがって、曖昧な漠然としたニュアンスしか伝わらないことになる。そのものとして伝えられないものを、伝達能力に限界のある“ことば”で伝えようとする構造そのものに、「妨げるもの」は内在していることになる。

次に「妨げるもの」としてあげられるのは、メディアである“ことば”である。われわれは個体的で多様な経験を的確に表す“ことば”を発明することはできず、与えられた近似的な意味をもつ“ことば”しか使用できない。しかも、この“ことば”は個人によって意味が違い、二度と同じ意味を持つことはないから、メッセージの解読・解釈は困難になり、しばしば誤読・誤解がおこるのである。又、この“ことば”は「物」を隠し、ひとり

大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院「研究集録」第7号(1987年)

歩きする力を持っているから、われわれは「物」そのものでなく「ことば」に反応して、その実態を見誤るのである。

奥山益朗は先に引用した文に続いて、保証できない原因は「ことば」にあると、伝達手段としての不完全さを言っている。オグデン・リチャーズも「言葉も身振と直接に連合し、それによって支えられない場合には、現在ではきわめて不備な伝達手段に過ぎない⁸⁴⁾」と述べ、「ことば」の限界を指摘している。「ことば」が「妨げるもの」であることも否定できない。

このように、コミュニケーションを「妨げるもの」は、構造そのものと「ことば」であると言うことになる。しかし、これらより大きく「妨げるもの」は、述べて来たようなコミュニケーションの実態に気づかない人間にあると筆者は考える。ハヤカワが書いているように「「ことば」を呼吸する空気かなにかのようにあたりまえのこととして、空気以上に考えようとし⁸⁵⁾ない」で、自分の話してることばの意味は正しく、日本語の解る人なら(日本の場合)総べて正しく通じているものとして、無意識にコミュニケーションしている人が多いと考えられる。この無意識的行動こそが、コミュニケーションの最大の「妨げるもの」なのである。ここに、一般意味論の教育的意義が認められるのである。

6. 終りに

この小論で述べたようなことを雑然と考えながら、S・G・を組み立て進めて来た。今、それをまとめてみたが、ハヤカワでさえその著書において、アメリカ人の共産主義に対する感化的内包を感じさせる表現が見られる位であるから、一般意味論的に誤った表現をしていないか、私には自信がない。又、どこまで私の考えが正しくコミュニケーションできたかということに対しても不安がある。その「難しさ」そのものを書いてみたのだが。

〔註〕

- (1) バーバル言語による情報伝達に限定する。
- (2) 「意味の意味」の序文の中(6頁)で岡倉由三郎は「人間の万物の霊長たるゆえんが、道具の使用にあるとして、人間の使う道具の中、いまだ曾って、言語という道具ほど偉大な道具は、他に決してない。」といている。
- (3) アラングレン著・藤竹訳「人間コミュニケーション」4頁
- (4) 「送出」と「受容」は同一項目とする。
- (5) ハヤカワ著・大久保訳「思考と行動における言語」IV版 31頁(各版により多少頁が違う)
- (6) 同上 172頁
- (7) 斎藤美津子「きき方の理論」55頁
- (8) S・Gとは筆者が創出した特別授業、Self Guidanceの略
- (9) 1. 見た時を限定していない。(例えば「入学式後」とか) 2. 設問形式でないから、分類に筆者の主観が入る。
- (10) コンドン著・斎藤、横山訳「ことばの世界」35頁

コミュニケーションを妨げるもの

- (11) 山本安英の会編「きくとよむ」 21頁
- (12) コンドン「前掲書」 43頁
- (13) ハヤカワ「前掲書」 30頁
- (14) 同 上 30頁
- (15) 加藤秀俊著「情報行動」 107頁
「高田保は現代日本の異色の評論家であったが、かれは、パリーについて、おそらく他の日本人の誰より、いや、多くのフランス人よりもはるかに博識であった」「しかも、おどろいたことに、パリーはおろか、フランスにも行ったことがなかったのである」
- (16) ハヤカワ「前掲書」 33頁参照
- (17) アラングレン「前掲書」 4頁
- (18) ハヤカワ「前掲書」 30頁
- (19) 井上尚美他著「一般意味論」 58頁
- (20) オグデン／リチャーズ著・石橋訳「意味の意味」 56頁
- (21) 森有正著「生きることと考えること」 69頁
- (22) 同 上 76頁
- (23) ハヤカワ「前掲書」 173頁
- (24) 同 上 172頁
- (25) 鈴木孝夫著「ことばと文化」 92頁
- (26) ハヤカワ「前掲書」 30頁
- (27) 同 上 63頁
- (28) 同 上 63頁
- (29) 同 上 60頁「人の頭の中に想起されているものである」
- (30) 同 上 60頁「それが外在的世界において指しているものである」
- (31) 同 上 73頁「語が引起す個人感情の雰囲気のこと」
- (32) 同 上 42頁「書き手が述べている出来事、人物事物について自分の賛成・不賛成を言い表すこと」
- (33) 奥山益朗著「話し合いと対話」 201頁
- (34) オグデン「前掲書」 60頁
- (35) ハヤカワ「前掲書」 17頁

〔参 考 文 献〕

- S. I. ハヤカワ著・大久保忠利訳「思考と行動における言語」原書Ⅳ版 岩波書店 1985年
- S. I. ハヤカワ著・四宮満訳「言語と思考」南雲堂 1972年
- S. I. ハヤカワ著・池上嘉彦、恵子共訳「ことばと人間」紀伊国屋書店 1980年
- A. ラポポート著・真田淑子訳「一般意味論」誠信書房 1965年
- J. C. コンドン著・斎藤美津子、横山紘子共訳「ことばの世界」サイマル出版会 1972年
- オルポート／ポストマン共著・南博訳「デマの心理学」岩波書店 1952年
- オグデン／リチャーズ共著・石橋幸太郎訳「意味の意味」新泉社 1982年
- 池上嘉彦著「意味の世界」日本放送協会出版会 1978年
- 井上尚美他著「一般意味論」河野心理教研究出版部 1975年
- 大久保忠利著「コトバの魔術と切れ味」三省堂新書 1971年
- 奥山益朗著「話し合いと対話」東京堂出版 1972年
- 加藤秀俊著「情報行動」中公新書 1972年
- 斎藤美津子著「きき方の理論」サイマル出版会 1972年

大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院「研究集録」第7号（1987年）

- 斎藤美津子著「話しことばの科学」サイマル出版会 1972年
鈴木孝夫著「ことばと文化」岩波新書 1975年
東京大学公開講座「ことば」東京大学出版会 1983年
築島謙三著「ことばの本性」法政大学出版局 1971年
森 有正著「生きることと考えること」講談社現代新書 1970年
森岡健二，藤永保共著「言語と人間」東海大学出版会 1970年
山本安英の会編「きくとよむ」未来社 1974年